



ものに合わせて生活を定めるのではなく、あらゆる人間の動作を許容する空間が住宅である。自由に振る舞える空間をつくり、それを住宅として成り立たせたい。

建築家は建主の欲望の表現者ではない

人間にとってもっとも大切な住宅のすべてを建築家にゆだねていいのだろうか。十分に配慮が行き届いた設計は建主の生活を本当に尊重しているのだろうか。建主が夢みる生活の場を忠実にすることは親切のように見えるが、実は生活の可能性を狭めている。建築家は建主の住まい方の可能性を狭めてはいけない。多様な生活ができる場を提供すべきである。私はすべてに自由度の高い空間を住宅にしたい。その中でどのように生活するかを考えるのは建主である。建主が個性的に生活を演出すればよい。住むことは個性の表出である。住み始めればその住宅に建主の嗜好や欲望が張りついていく。そのとき建築家のつくる住宅と建主の住まいとは一致しない。住宅をつくることとその中に生活を演出することとは別なのだ。生活は変わっていくものである。建主の生活要求は一時的なものであり、要求の持続性は建築の寿命と比較すれば一瞬の出来事と思える。住宅にとってもっとも基本的要素の家族構成でさえ変わるのである。住宅の設計において主眼をおくのは、日常生活の諸問題の解決ではなく、住宅がいかに多くの出来事を含み得るかということだ。建築家は多様な生活が可能になる住宅を提示すればよい。

「生活感のない住宅」という言葉は批判的に使われている。「生活感のない住宅」とは建て主の生活が見えず、建て主の欲望を感じない住宅であるようだ。生活感や寝室にこそ表れる。セックスは人間の生活の一部であり、セックスを除いては生活を語り得ないはずだ。しかし私はそこまで表現された建築家による

住宅を知らない。「生活感のない住宅」の「生活」とは限定された生活である。実は「生活感のない住宅」といわれるものは生活の可能性を秘めた住宅なのかもしれない。限定されない生活を求める私は建主の欲望(生活)の表現者ではない。建築家のつくる住宅には生活感の表現を求めてはいけない。

「住むこと」の融通性を開く家

現在の宅地の広さは、建主の収入から決まるという考え方がある。そう考えると50㎡ほどの狭い土地に家族4人のための住宅を建てることは特殊な例ではないのかもしれない。しかしその狭い土地に人間の身体に十分な住宅をつくることは可能なのだろうか。このような疑問をもたずに建主の要求だけを満たす住宅をつくる建築家の姿勢は正常であり、真に社会性をもつといえるのであろうか？ 私は狭い土地にははじめから身体に十分な住宅は存在できないと思う。狭小の敷地に最善の努力をし、難しいパズルを解くように効率よく必要な部屋を確保した建築家のつくった住宅がある。また同じような土地に、建主の欲望を満たし、見事に現実をなぞった建売住宅を見ることがある。このふたつの住宅は設計技術の優劣と表層表現は違うが、建主の欲望をなぞり現実を反映しようとする姿勢は同じである。その住宅の存在は大同小異である。このような現実を反映した住宅は長い年月に耐え得るのだろうか。現実を忠実に反映した住宅は現実が変われば新たな問題が起こる。狭い住宅ほど起こりやすい。このような対症療法ではいつまでたっても問題は解決せず、人間の求める豊かな住空間には到達し得ない。私は現実とのずれがあっても人間の身体に十分な空間を住宅内に提示したほうが社会的だと思う。狭い住宅ほど現実を反映する必要はないのである。このような発言は無責任に聞こえるかもしれない。現実には狭い宅地は存在し、そのための住宅も求められている。だが

狭い土地のための住宅の創造については心配しなくてよい。そのような狭い土地が一般化すれば、多くの解答が示されるはずだ。パズル解きは住宅産業が得意とするものだ。建築家のつくるべき住宅は小さければ小さいほど、生活を限定しない、のびやかな空間が必要である。狭い住宅に個室の集まりをつくってはいけない。割り切って考えるべきである。1畳ほどの寝る場所をつくり、夫婦なら重なって寝てもいい。個人の確立のために個室は必要であるが、個人が確立すれば、個室はいらない。そのようにしてできた空間の余裕をのびやかで身体に十分な空間にあてればよい。のびやかな空間をもつ箱は長い年月を有効に耐え得る。私は狭い住宅は限りなく多様性をもつ単純な箱に近づくという実感をもつ。また住宅の寿命について構造の強固さや、間取りの可変性は大切であるが、物理的な考え方だけでなく「住むこと」についての考え方の融通性はさらに大切である。考え方次第で生活は自由になる。住宅を建てることは人生において数少ない自身の生活を考える機会である。自由に考え、人生を自由に生きるための転機なのだ。建築家はその機会を生かす手助けをすればよい。生活についての考え方を一新させ、建主が生活の融通性を理解できるような住宅を用意したい。その住宅こそ永劫に存在し得る。

□

この「小さい木箱」は夫婦と小学生ふたりのための住まいとイラストレーターである夫の仕事場として使われている。仕事場の広さを確保すれば住まいに当てられる面積は60㎡ほどである。私は扉なしで続く3層の箱をつくり、いくつかの住み方を提案した。現在、建主は工夫しながら地階を仕事場に、1階を4人の寝場所に、2階を家族室として生活している。